

ブブノワ展開催記念講演会

## 「スフミのブブノワさん」

早稲田大学名誉教授

安井 亮平

時 一九九六年十月二十五日（金）

於 早稲田大学総合学術情報センター

三階 第一会議室

一九九五年秋、文学部ロシア文学専修から版画家で元本学文学部露文科講師ワルワラー・ブブノワ（二八八六一—九八三）氏の版画・水彩等の作品一四九点が図書館に一括寄贈された。それを記念して一九九六年一〇月二二日から三二日まで総合学術情報センター二階展示室で展覧会「ブブノワ展——早稲田で教えたロシアの版画家——」を本学ロシア文学会との共催で開催した。展覧会では寄贈資料を中心にして本学名誉教授安井亮平氏ほか多くの方々の御協力を得て、絵画作品二〇点、挿絵・装丁作品一六点、著作九点、展覧会・図録パンフレット九点、伝記資料七点、書簡四点、その他在りし日のブブノワ氏の写真などを展示して、版画家としての活躍とともに早稲田大学ロシア語講師としての活動を紹介した。

展覧会の会期中の一〇月二五日に記念講演会を開催した。講演はブブノワ氏の早稲田における最後の教え子の一人である安井亮平氏と北海道大学スラブ研究センター招聘研究員として当時来日していたロシアの日本研究者イリーナ・コジエーヴニコワ氏にお願いした。安井亮平氏はスライドを使用しながら「スフミのブブノワさん」と題する講

演を行った。コジェーヴニコワ氏は当日体調不良のため来校できず残念ながら講演は実現しなかったが、講演会にはブノワ氏にゆかりのある方々を中心に多数のロシア文学関係者が来聴され、氏への想いを新たにされた。本稿はその時の講演記録である。



謝 辞  
 早稲田大学総合学術館サミナー  
 事務局 佐々木 幸子  
 早稲田大学文学部  
 佐々木 幸子  
 早稲田大学文学部  
 佐々木 幸子

## ○図書館事務部長

ただいまからブブノワ展開催記念講演会を開催させていただきます。

最初に図書館長、岡澤憲美がご挨拶を申し上げます。

## ○岡澤憲美図書館長

岡澤でございます。本日は早稲田大学図書館によるこそお越しくださいました。

早稲田大学ロシア文学会との共催によるブブノワ展を記念する講演会の開会に当たり、ご挨拶を申し上げます。

ブブノワ先生は当大学露文科の恩人でございます。きょうお集まりの皆様方にはすでにご承知のとおり、当大学は一九二〇年にわが国最初のロシア文学科を開設いたしました。これは、それに先立つ明治四十年代、自然主義文学が盛んになり、トルストイやツルゲーネフを初め、ロシア文学が流行しましたが、その翻訳、紹介の仕事を主に担ったのが抱月門下の早稲田の人たちだったという伝統を背景にしております。

ブブノワ女史は一八八六年、サンクトペテルブルクに生まれ、一九二二年、日本人と結婚された妹さんのアンナさんを追って来日されました。そして一九二四年、開設されて五年目の早稲田のロシア文学科の教壇に立たれることになりました。以来、足かけ三十五年、途中戦争による中断はございましたが、一九五八年にロシアに帰国されるまでブブノワ先生は非常勤講師の身分のまま早稲田の学生にロシア語を教えてくださいました。

スフミのブブノワさん

早くから版画の制作を手がけ、日本滞在中も数多くの作品を制作して、高い評価を受けておられました。ロシアに帰国される際にその作品の一部を特にかわいがっていたお弟子さんに残して帰国されました。

それらの作品は早稲田の露文科の歴代の先生方が受け継いで保管しておられました。このたび安井先生がご退職されるのを機会に本図書館に寄贈される運びになりました。点数は全部で百四十九点で、階下の展示室に並べてある作品がその一部となっております。

今回の展覧会は、そのブブノワ作品の図書館への寄贈を記念して開催したものでございます。本日は、北海道大学スラブ研究所研究員で、ブブノワさんを初め、日本に関係したロシア人のことにお詳しいイリーナ・コジェーヴニコワさんにおいていただく予定でございましたが、あいにくご健康がすぐれないということで、まことに残念でございます。

しかし、ブブノワさんの最後の頃の教え子である安井先生をお迎えして講演会を開催できますことを皆さんとともに喜びたいと思います。

どうぞきょうの短い時間、十分ご堪能のほどお願い申し上げます。(拍手)

## ○図書館事務部長

ただいま館長からご案内申し上げましたように、本日講演予定のイリーナさんが急病ということで、残念ながら安井先生お

一人になりましたけれども、それでは講演に入る前に安井先生のご紹介をさせていただきたいと思えます。

本大学名誉教授であられます安井亮平先生は、早稲田大学文学部ロシア文学科でブブノワ先生の薫陶を受けた最後の学生さんの一人でございます。大学院生のときには図書館が所蔵する二葉亭四迷資料の整理に尽力され、校訂者の一人として目録を編集されました。一九六六年に文学研究科博士課程を修了し、以来一九六六年三月までの三十年間、早稲田大学文学部でロシア語とロシア文学の教鞭をとられました。その間、しばしばロシアにブブノワ先生を訪問され、また書簡を往復して、学生時代以来の師弟の関係を温められました。

近年は、共同研究、日本とロシアグループに属し、日露関係の研究に当たっておられます。本年三月に退職され、名誉教授になっておられます。

ブブノワ先生に関する主な著作としては、随筆「ブブノワ先生の近況」〔窓〕十一号・一九七四年）、「ブブノワ先生の手紙」〔ワルワラー・ブブノワ作品展カタログ〕（秀友画廊・一九八七年）「ブブノワさんとロシア文学」〔ブブノワ一八八六一一九八三〕展目録（一九九五年）があります。翻訳としては、「ワルワラー・ブブノワ回想録から」〔窓〕四十五号・一九八三年）、そして本年は「ブブノワさんの手紙」を編集、翻訳して刊行されました。また昨年はブブノワ先生の大回顧展、「ブブノワ一八八六一一九八三」（町田市立国際版画美術館、宮城

県美術館）でカタログを監修されております。

それでは早速安井先生の講演に入らせていただきます。安井先生、よろしく願います。

○安井亮平先生

イリーナさんがちよつと健康状態がよくないということで突如来られなくなりましたので、私一人となってしまいました。前座のつもりで軽く引き受けたんですけれども、独演会みたいになってしまいました。ちよつと荷が重くて、昨日から私も血圧が非常に上がってしまっていて、どうなりますやら自分でも自信がありません。それと、ことしの三月末で現役を退いたとたんに体力が衰えましたので、座ってしゃべらせていただきます。いや、やはり立って話します。

先ほどご紹介がありましたように、ブブノワさんは一九二二年に三十六歳のときに日本に來られ、それから奇しくも三十六年間日本で暮らされまして、一九五八年七月、七十二歳のときに帰国されました。

その後、黒海海岸のスフミという町に住まれて、ここで一九七九年まで、二十一年余り暮らされました。最後に一九七九年、九十三歳のときにいよいよ生まれ故郷のレニングラードに帰られて、ここで九十七歳になられるほんのわずかに前に亡くなられました。百年近い生涯を送られて、実に革命と戦争の二十世紀を象徴するような劇的な生涯を送られたわけですね。

きょうは、この中の一九五八年から七九年まで二十一年間に



わたってスフミで暮らされたときのことを、中心にお話したい  
と思います。

これはあくまでも私が見たプブノワさんでありまして、プブ  
ノワさんというのは非常に大きな存在であったものですから、  
それぞれの教え子がそれぞれの像を抱いていると思います。で  
すから、これはあくまでもきわめて私的な思い出というふう  
に聞いていただきたいと思います。

一九二二年、三十六歳のときに日本へ来られましたけれども、  
来られた二年後の一九二四年から三七年まで、プブノワさんの  
年齢にして三十八―五十一歳の間、露文の講師をなさいまし  
た。一九三七年に露文科は閉鎖されます。これは、前年の三六年に  
二・二六事件が起きたという状況を考え合わせると、事情を了  
解されると思います。

露文科が再開されるのは一九四六年、戦後でありまして、そ  
れから五八年七月に帰国されるまで露文科で教えられました。  
ちょうど六十一―七十二歳に当たります。この間、ロシア語と、  
専門科目のロシア文学を教えられました。これは主に詩であり  
ます。

私自身は一九五四年に露文科に入りまして、五五年の二年生  
のときから五八年に帰国されるときまで三年余り教わることが  
できました。ちょうどプブノワさんが六十九―七十二歳のとき  
で、私とは五十歳ぐらいの年齢差があります。

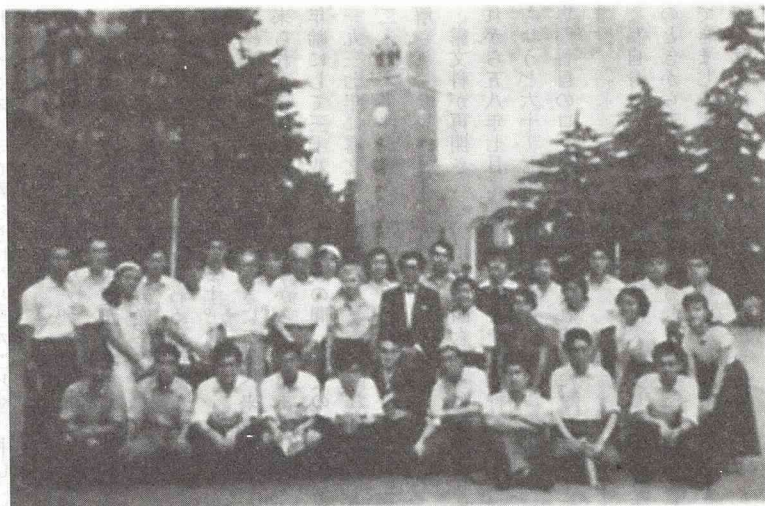
早稲田の定年は七十歳でありまして、この規則は非常勤にも

スフミのプブノワさん

適用されますので、一九五七年三月末日でプブノワ先生は定年  
で辞められることになったわけですが、そのとき私たちの一年  
下のクラスが猛運動をして署名を集めたりして、その結果、特  
別な処置として延長が認められたわけです。帰国される直前ま  
で授業をなさいました。



これは一九二七年の、プブノワ先生がまだ若い頃です。この  
下段左の方は中山省三郎さんです。これについてはまた後ほど  
触れたいと思います。



この写真は一九五八年です。真ん中にいらっしやるのがブノワ先生ですが、その左横が黒田先生、丸山先生、右側の、蝶ネクタイの方が谷先生です。私もここに（前列右から三人目）おります。ちよつと見分けがつかないかもしれませんが。（笑）まだ二十二、三歳ですからやむを得ないと思いますが。

大体前に座っているのは私の同級生です。ほかに、前列の一番右端の若々しいのが水野さんで、こちらの後列左端が法学部の先生をやっている高山さん。この方（丸山先生の左）が草鹿さん、それからその左が芹川さん、この二人はもう亡くなっています。

後ろに立っているのも大体私たちの同級生が多いんですが、この人（ブノワさんの右後）が一級下の佐々木千世さんで、この人が、先ほどお話がありましたけれども、今度の展覧会のコレクションをブノワ先生から託されていた人です。でも、不幸にも若いときに交通事故で亡くなりまして、その後私のところまで最後にきたというわけです。これを今回図書館に寄贈いたしました。

この写真は、先生が定年で辞められた後、五七年四月から一年ちよつとにわたってブーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』の講読をしていただいたんですが、そのときの一番最後の授業の後に撮った記念写真です。ただし、毎回出ていた人ばかりじゃなくて、そのとき特別参加した人がいますから、実はこんなに多くはなかったんです。ただ二十人ぐらいいはしよつちゅう聞いていました。

このときはいわゆる授業じゃありませんので、早稲田の学生以外に、卒業生とか、ほかの学校の人ですね。水野さんの右後にいるのが安井郁子さ

んですが、あの方はお茶の水女子大の学生でした。ほかの学校から来ていた人もおります。

非常に楽しい授業でした。このことはまた後ほど触れたいと思います。後ほどの話にも関係しますので、私たちの懐かしい学生時代はこんなふうなイメーヂであつたということをし、ちよつと頭に置いてください。

私はちよつと最後の教え子になるわけですね。三年余り教えていただくことができ、これは非常に幸せだつたといま思っております。

帰られた後、ずうつと文通をしております、今回学校を辞めるときに、私は十年早く学校を辞めたものですから、学校から割増金がついて、思いがけなく高額の退職金が出ました。かみさんとうかう使うか相談した結果、じゃブノワ先生からいただいた手紙を記念に出版したらどうかということで一致いたしました、それでこんな本（「ブノワさんの手紙」）を出しました。これは何人かの方に非常に献身的に協力していただきました、自分で言うのもおかしいんですが、ちよつときれいな、しやれた本になつたと思います。

この表紙の赤い色はブノワ先生の好きな色だつたんですね。ロシア語の原文と、へたな私の訳と、写真とを載せまして、私への個人的な書簡なものですから気がひけましたけれども、後ほど触れたいと思いますが、ロシアの書簡文学としてもブノワ

ワ先生の書簡全体を一つの傑作だというふうに思いますので、今回出版することにいたしました。

私が初めてロシアへ行ったのは一九六八年でした。モスクワ大学のロシア語の教師のゼミナールで行きました。しかしこのときは、スフミは外国人が行ける町であつたにもかかわらず、ピザがなかなかもらえなかつたんですね。それでそのときは諦めました。それでその三年後、お別れして十三年後の一九七一年に会いに行きました。

いまま鮮やかに覚えておりますが、「ああ、ついにブノワ先生に会える」と思ひまして、部屋のドアをノックいたしました、「あなたが安井さんか」と言うんですね。ガツカリしちゃいましたね。（笑）せっかく苦勞してピザを獲得して、はるばると会いに来たのに、「あなたが安井さん？」とは何ごとであろうかと思つて、よく聞きましたら、二、三人の顔が混じつていてちよつとはつきりしなかつたらしいんです。

でも、それに決して懲りませんで、それから大体二年に一回ずつ会いに行きました。これは私にとつては非常にいいことで、ブノワ先生というのはものすごい存在だということは学生時代にわかつていたんですが、本当の偉さがわかつたのは、スフミへお訪ねして、それで手紙をもらつたりしてからです。大体二年に一回ずつ訪ねまして、きょう来ていらつしやる秋山さんなんかとも一緒に行つたことがあるんですが、それはそれは楽



しいものでした。

その後、アンナさんが一九七九年五月に八十九歳で亡くなられました。四歳違いです。ブブノワ先生はアンナさんのことを非常に心配しておられました。アンナさんはバイオリニストとしては非常に優秀な方だったんですが、ちょっと子供みたいな方で、一人でおいておくのがブブノワさんは非常に心配だったんです。ブブノワさん、ブブノワさんといっているのはワルワール・ドミトリエヴナのこと、われわれの先生のこと、ブブノワさんと言いますが、アンナさんもむろん姓はブブノワです。

アンナさんが亡くなられた後、急激に弱られました、一九七九年にスフミを引き払って、ようやく生まれ故郷に帰ることができたわけです。ここで四年余り暮らされて、八三年三月二十八日に、間もなく九十七歳というところで亡くられます。

私はそのころ早稲田から派遣されてロシアで十カ月暮らしていたものですから、一九八二年の一月と五月に、五月はレニングラードに一カ月いましたが、ちよくちよくお訪ねしました。

このときはブブノワ先生はもろろん絵を描くことはできないし、ほとんど居眠りをされていたんですが、皮肉な方なものですから突如厳しいことをおっしゃって、ビックリしていると、次の瞬間には眠っていらつしやるという、なんか悟り切った人のような生活をしていらつしたんです。最後はブブノワ先生はフランス語ばかりしゃべっていらつしやいました。

小さいときにお母さんの教育方針でフランス語とドイツ語を徹底的に仕込まれたんです。女の人が一本立ちできるのは語学と芸術しかないというお母さんの考えで、ロシア語は母国語ですが、フランス語、ドイツ語、英語、あとイタリア語もおできになって、ゲートルとか、シエイクスピアとか、フランスの詩人とか作家というのは原文でスーッと口ずさんでいらつしたような方です。全くロシアの貴族文化、十九世紀文化の大頂点であつたと思います。

これからお話したいことは、先ほどお断りましたように、私自身の非常に個人的な思い出に終始すると思えます。

一九五四年に入学したとき、一年生の担当が横田先生でありまして、入学したとたんに、二年生になったらブブノワというものすごい先生の授業があるから、ぜひ出席するようにとおっしゃつたんですね。実はわれわれの一年上のクラスというのはあんまり出席しなかつたものですから、ブブノワ先生は非常に気にしていらつしたらしいんです。

横田先生自身もブブノワ先生に教わっています。一九二六―三〇年にかけて露文にいらつしたんですが、その当時のブブノワ先生の教え子の一人になるわけです。横田さんの前後には黒田辰男さん、中山省三郎さん、村田春海さん、上田進さん、谷耕平さんとか、こういうすごい連中が学んでいたわけです。

当時は女の人は正規の学生になれなかつたものですから、聴講生として湯浅芳子さん、網野菊さんなんかも学んでいらつ



しゃいます。ちようど、ロシアをやるうと思つていた露文としては第一世代のすごい人たちが、このとき学んでいたわけです。このとき学んでいた人たちがすべてブブノワ先生を刺激剤として大きく花を開いていったことはいえると思います。

学生時代のブブノワ先生というのは、ただただひたすら恐ろしかった。今度この本を同級生に上げましたときに、そのお札の手紙に何人かの人「いまも夢に見る」と書いてありました。夢に見るといふのは、怒られている夢です、うなされていることですね。何しろ恐ろしい先生でした。

ブブノワ先生自身は小さな方でありまして、背は百五十センチちよつとで、非常にかわいい顔をしていらして、われわれが習ったときは七十歳前後でしたが、非常に深い湖のような緑の目をしていらして、それから石版画をやつていらしたから手が非常に太くて、驚くべき太い足をしていらした。

で、いつか僕と同級生が花巻のほうを旅行をしております、花巻の駅前でポーツとバスを待つていたんですね。そしたら若い女の人が目の前へ来たんですね。で、三人ともうつむいたら、そのとき太い足が目に入ったんですね。そしたら三人が同時に「あ、ブブノワ先生だ」と言つたのをいつも思い出します。

その方が、体は小さいんですが、実に堂々としていらしたんです。授業のときも実に堂々として、誇り高い顔をしていらした。

授業は大体詩を教わりました。ロシアの詩で、特にプーシキ

スフミのブブノワさん

ン、レールモントフ、チュツチェフ、フェート、アレクセイ・トルストイとか、抒情詩人を主に扱われたんですね。この詩は全部暗記していらしたんです。別の詩人のことでも何か質問があつて聞きに行きますと、ブブノワ先生はたちどころに前後の詩を全部朗読できたんですね。それはそれは見事なものでした。わからない詩なんかありませんね。ときには意地悪をしようと思つてちよつと知られない作品を持って行くんですが、ブブノワ先生はニコツとして前後を朗読なさるんです。

いま下の展覧会で録音された声が放送されていますが、あれはちよつと硬いんですね。実際はもつとやわらかい声でした。さすがのブブノワ先生もマイクの前で緊張なさつたよう、硬い音になっています。

私たちのときはコピー機械がありませんから、黒板に全部詩を書かれて、それをわれわれは真面目にノートに写します。それをちよつと低い声ですが、ものすごくきれいな、かわいらしい、独特の特色のある声で朗読なさる。それはそれはすばらしい朗読でした。身体中を使って朗読なさる。いかにも自分自身が楽しんでいらしたんですね。

何年か後の話ですが、レニングラードへ行つたときに、「プーシキンに捧げる夕べ」というのがありまして、「青銅の騎士」を悲劇役者が朗読するのを聞きましたけれども、「あ、なんだ、ブブノワ先生のほうがもつといいや」と思つて聞いていました。

それはそれはすばらしい朗読でした。どんなに予習してもわからないところも、プブノワ先生の朗読を聞くと、なんかわかっちゃうんですね。

ちょうど二葉亭四迷がかつてロシア語を勉強したときに、ロシア語の文調というのに驚いて、そしてそれを日本語に移そうという努力をいろんな翻訳なんかでするわけですが、私たちはありがたいことにプブノワ先生のおかげでそういう体験をすることができて、非常に幸せなことだと思っております。

何度も何度も朗読しながら黒板に書かれて、それをわれわれは書き写すわけですが、その後内容を説明されるんですね。語句の説明、作詞法の説明、どういう点が美しいのか、それを非常に簡単な言葉で説明なさるんです。これは本当に手品のようでしたね。非常に簡単な言葉で非常に難しい複雑なことを説明できるということが、果たして何を意味するのか、どういうことなのかというのは、特に私が教師になって以来、それがよい身にしてみました。

プブノワ先生と自分を比較するのはおこがましくて、恥しいことですけども、どうしてもああいうことはできない。きわめて複雑なことを単純な言葉で説明なさる。これはプブノワ先生自身の本質だと思います。

説明なさいますして、それからが困ったことなんです。ときどき質問なさるんですね。私はロシア語がしゃべれなかつたものですから、質問に困ってしまうんですね。そうすると先生も困

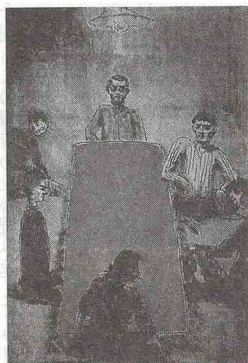
りまして、机の間をグルグル、グルグル歩かれて、「ダ・イーリ・ニエツト（ダかニエツトだけでもいいから答えてほしい）」とおっしゃるんですね。それは答えてもいいんですけど、その後すぐ、「パチエム（なぜ?）」と聞かれるんです。「なぜ?」という問いにどうして答えられますか、しかも外国語でしようがないから、首をこうやるんですね。(笑) それからこうやっているんですね。

それから、目が合うと当てられちゃいますから、みんなうつむいているわけです。ちょうど深海にもぐっているみたいなのですね。(笑) そうしますと、プブノワ先生がしよつちゅう言っている「死の沈黙」が訪れるわけです。われわれのクラスはわりとよくできる人がいましたけれども、それでもなおときどき「死の沈黙」が訪れます。

で、プブノワ先生が困っているのはわかるんですけど、へたに答えたら、ものすごく厳しいんです。すぐ皮肉の雨なんです。えらく辛辣で、口が悪いんです。これはプブノワ先生特有の現象かと思っていましたら、モスクワ大学で授業を受けるようになりまして、ロシア人の授業というのはみんなそうだということがわかりました。プブノワ先生がわれわれを憎んでいるんだとじゃなくて、これはロシア人の授業のやり方ですね。

授業というのは本来そういうものだろうと思いますが、日本ではどうでしょうか。自分も先生をやっていたもので、あんまり大きな口はきけません。恥しくなります。

われわれの学生時代の雰囲気を知っていただくためには、次のスライドをご覧になると一番よくわかると思います。



生じゃないかと思えます。こういうように非常に暗くて、しかし非常に真面目で、非常にストイックでというのが、われわれの学生時代です。

たとえば私たちの一年上のクラスに五木寛之さんがいましたけれども、五木さんの『青春の門』とか、何級か下の李恢成さんの作品をお読みになると、当時の露文の雰囲気がよくわかると思います。ああいうように非常に貧しくて、暗くて、しかし非常に真面目で、ストイックで、まあ概して非常に暗い人たちですね。今日風じゃないと思えます。

ブブノワ先生はそういうわれわれを相手に、そういう連中を前に実に堂々としていらしたんです。非常に偉い人だというのはよくわかったんです。その偉さというのは、ただ朗読がうまいとか、いろんなことを知っているとか、感受性が鋭いとか、

スフミのブブノワさん

そういうことじゃない、何か本物の人間がわれわれの前に立っているという感じが常にしていました。ブブノワ先生に会ったということは、いま四十年以上経って考えますと、私にとっては非常にうれしい、非常によかったことだと思っております。しかし当時はもちろんその良さがどこにあるのかというのは全然わからなかったんです。



これは一九五六年の作品で、ブブノワさんの自画像です。私が初めてこの作品を見たのは、一九五八年の白木屋での展覧会です。日本での最後の個展です。そのとき、クラスの何人かが毎日受付に行っておりまして。それはまたそれで非常に面白いことだったんですが、そのときこの作品を初めて見まして、「あ、ブブノワ先生にこんな面があったのか」というのでビックリしたんですね。こういう面は教室では私が感じていた限りはいつも見せることはなかった。それから自分の絵について語ることもなかった。

家へ何うと、自分の絵を見せてくださって、いろんな話をしてくださるんですが、それ以外のときは自分の絵というものについて語られることはなかったんです。

もう一つ、家へ行くとおすしが御馳走になれたんですね。当



時の学生にとつておすしというのは夢のようなことですから、おすしにつられて私はよくお訪ねしていたんです。必ずおすしが出了。

いまもお話ししながらいろんなことを思い出しております。

こういう面は私たちは知りませんでした。ですからブプロワ先生にこういう面があったということは私にとつては驚きでありました。

もともと、一九二四年、日本へ来て二年後にブプロワ先生が早稲田、あるいは外語の先生になられたというのは、全く生活のためでありまして、しばらく前にこういう本が出ております。これは私は『理解の試み』というふうに翻訳しておりますけれども、イリーナ・コジェーヴニコワさんが編纂した、ブプロワさんの回想記、論文、それから書簡を取めた、非常にいい本です。今回もこの報告のため読み返してみました、ほんとにいい本で、ロシア語のできる方はぜひこれを読んでいただくとありがたい。いまナウカ社で扱っております。求めていただければありがたいと思います。これは私たちの一年上の神馬さんとかがスポンサーになりました、お金を出してこういう立派な形になったわけです。

幸い、この書簡の中には日本に来たときの書簡も残っております、すべてではありませんが。そこには、生活のために教師をやるのがいかに辛いのか、自分は本来は画家であるのに、なぜ教師をしなきゃいけないのか、時間的に束縛されるし、それ

にあの方は良心的な人ですから準備をせざるを得ないわけですね。そういうことを縷々書いていらつしやるんです。

しかし数年経ちますと、そうでもなくなつて、一つは同じような関心を持つている若い人たちの仲間ができたということです。それから、教えることによつてブプロワさん自身初めてロシアの、自分の国の文化というものの理解を深めていったんじゃないかというプロセスが手に取るようにわかります。ですから、ブプロワさんにとつてもそれほど無駄なことじゃなかったと思つていらしたのではと、思います。

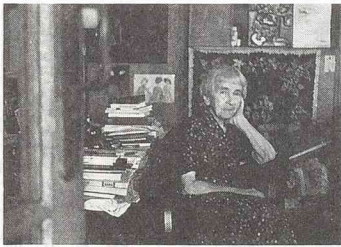
それから日本の文化とか、日本の絵画を理解する上で、やはり若い友人たちができたということは非常によかつたことじゃないかと考えます。まあそう考えて慰めたいと思います。

非常に立派な方だと思ひながらも、実はその立派さがどこに

あるかというのは、学生のときは、何しろ五十歳も年が違いますから私の理解を絶したわけです。

それで、先ほど申しましたように一九七一年に十三年ぶりにスファミにお訪ねしました。

これは一九七一年のブプロワさんです。非常に美しい方ですね。しかし非常に怖い方です。

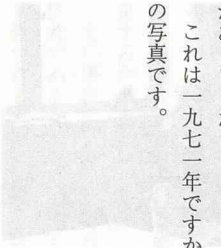




隣の方が妹のアンナさんで、四歳違いです。この方はバイオリンの専門家、日本のバイオリンの基礎を築いた方といつても間違いないと思います。この方はずいぶん長身の方でした。日本人の小野さんという方と結婚して、そのためにブプロワさんもやがて孫をお母さんに見せるために付き添って日本に一九二二年にいらっしゃるわけですね。そのもともになった方がアンナさんで、子供のような方でしたね。

会いますと、「私の夫は日本人ですから、私も日本人です」とおっしゃって、日本語しかしゃべらなかつた。それがなぜか亡くなる前になりましたら、「私は日本は嫌いです」とおっしゃって、今度は日本語をしゃべらなくなつた。そういうことがあります。

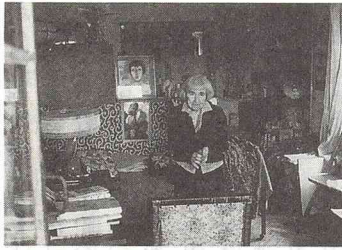
これは一九七二年ですから、ブプロワ先生の八十五歳のときの写真です。



スフミのブプロワさん



それから一九七四年の写真を見てください。ブプロワ先生が八十八歳のときの写真です。これはカラーじゃないものですからはずきりしませんが、やはりアンナさんとブプロワ先生の二人の写真です。同じスフミの家ですね。



これは一九七八年で、九十二歳のときの写真です。八十歳の後半からは、居眠つていて椅子から転んで骨を折つたり、足を痛めたり、いろんなことがあります。刻々と体が、特に足腰が弱つていかれたんですが、しかし調子のいいときはこういうような状態でした。絵を非常に熱心に描いていらした頃です。



これは実際に絵を描いていらっしやる所です。やはり一九七八年、九十二歳です。非常にしっかりしていらっしやいます。



して、実はスファミにいたとき、ハゲのカーゲーベーが一人まつわりついていました。このときもレニングラードへ訪ねて行ったんですね。これは私が見た話じゃなくて、世話をしてい

一九八二年五月に私が最後にお会いしたときの写真です。もうこのときはブブノワ先生は九十五歳です。横にいる、まだ真つ黒な毛をしているのが私でありまして、こういうときもありましたから。(笑) もうこのときはしょっちゅうベッドに横になっていらして、ときどき目を覚ます。

ただし非常に皮肉な方でありま

たヴェーラさんから聞いた話ですが、居眠っていたのが突如目覚まして、そのカーゲーベーの頭をボン、ボン、ボンと叩いて、「この人は恐ろしい人です」って。それで次の瞬間は眠っていたんだそうです。(笑)

それから、やがて日本から勲章をもらえるんですが、そのときもブブノワ先生のセリフが非常に面白いんです。「私は天皇を知らないのに、なぜ天皇は私のことを知っているんでしょう」と言った。(笑) まさにブブノワ先生ですね。それがブブノワ節です。そこにわれわれは非常に魅かれていくわけです。スファミというのはグルジアの黒海沿岸にあります。アブハジアとグルジアは、いまちよつと戦争は鎮まっていますが、いつまた戦争になるかわからない。黒海沿岸の南の国です。モスクワから飛行機でちよつど二時間で、コーカサス山脈を越えたところなんです。私も何度か行きましたが、モスクワとの間は飛行機で二時間ですが、気候は全く違う。いかにも南の国で、光にあふれて、色彩にあふれて、非常にいい保養地です。

そこにいらっしやったのは、姉さんのマリーヤさんがそこでピアノの先生をしていらして、病気だったので、その介抱をするために早く帰られたのです。

先ほど言いましたように、これから先のことは手紙で跡づけする以外にないんですが、この本〔理解の試み〕に出ている手紙というのは、いかにも外国で暮らしたロシア人が書いた手紙なんです。ですから、ロシアでずつとそのまま暮らしていた



人だったら恐ろしく思つて絶対書かないようなことを、プブノワ先生は悠々として書かれたわけです。そういう点からも非常に貴重な手紙だと思ひます。

もう一つは、外語の先生をやつていらしたミチューリンさんの奥さんもやはり中央アジアに帰られまして、その人にあてた書簡は特別すばらしいんですが、ちようどいい文通の相手がいなわけです。そういう手紙をもらつても物おじしないような、やはり日本に長いこと暮らして、ロシアばつかりに暮らしてはなかつた、物おじしないようなロシア人の文通相手がいたということが、この書簡を非常にすばらしいものにしてあります。後ほど紹介したいと思ひますが、ふつうのロシア人だったら絶対書かないようなことをズケズケと書いています。驚くべきことですね。

私は古い世代のロシアの女の人はどう考えるかということをおもうときは、いつもプブノワ先生を思ひ出すわけです。それからもう一人、プリシヴィンという作家の奥さんに晩年私は非常にかわいがつてもらつたものですから、その二人のことを思ひ出して、プリシヴィンの奥さんだったらどう考えるか、プブノワ先生だったらこういう場合はどう考えるかということをお推量するわけです。

七〇年代にプリシヴィンの奥さんに手紙で、プリシヴィンは信者であるかどうかということをお聞ひいたんですね。ばかなことを聞いたと思ひます。そうしてしばらくしてロシアへ行つて会

いましたら、「安井さん、あなたはなんてナイーブな人だろう。そんなことを手紙に書けると思ひますか。あなたはまだロシアが何もわかつていない」つて、えらくとつちめられました。

プブノワさんはそういう恐怖心がなかつたんですね。プリシヴィンの奥さんのように立派な人でさえも恐怖心があつて、そういうことは絶対手紙に書かなかつた。プブノワさんは外国生活が長かつたため、またああいふ性格ですし、あるいはグルジアで生活したということが影響しているかもしれませんが、物おじしないで書かれた。

そういう点でこの書簡を非常に面白くしております。証人としても、証言としても私たちが読んで役立つ本です。ぜひ読まれたらいいと思ひます。

この書簡で追つていきますと、やはりスフミにいらしたのは非常に不本意だつたということがわかります。私はプブノワさんの手紙を三十六通取つてありましたが、その三十六通の中には入つていませんでどこかになくしちゃつた手紙ですが、せつかくロシアへ帰つて来たのに、きれいなロシア語を聞けなくて私は悲しいということを書いた手紙をもらつて、それが非常に鮮明な記憶として残つていますが、その手紙の中には入っておりません。

きれいなロシア語は聞けないし、ロシアの文化と遠いし、それからある手紙の中では「せめてシベリアに行きたい」というふうに書いてあるんですね。モスクワやペテルブルクは外国に

住んでいたロシア人が住むのは非常に難しいということがありまして、せめてシベリアのロシアで暮らしたいということが書いてあります。それぐらいスフミは嫌だったわけですね。帰国してまでなぜわざわざ異国にいなきやいけないか。

そのほかに問題は、住宅が非常に悪かったんです。最初住んでいた住宅は、姉さんの家に同居するわけですが、よくロシアの田舎にあるように、水道もない、下水道もない、トイレは庭にあるというところですよ。で、アンナさんから早く帰国したいという知らせがありますと、ブプロワさんは「もつと延ばしなさい。あなたはここでは絶対暮らせないから、日本にそのままいなさい」というふうにも返事を出していらしたようです。しかしアンナさんは二年後の一九六〇年に帰国されるわけですよ。不満は生活条件で、主に住宅条件です。

もう一つは、収入がなかったんです。一九五九年に初めて年金をもらいます。五九年にグルジア美術家同盟の会員として選ばれて、額は大きかったことはいくらでも年金をもらわれる。それからは自分のお金で暮らせるようになりますよ、しばらくするとちっちゃなアトリエももらって、もう先生なんかをやる必要もなくて、ただひたすら絵を描くようになる。

帰国されるときも、教え子の中で「ブプロワ先生にこのまま日本にいても良かったほうがいいんじゃないか」というような声がありましたけど、私は帰られてよかったというふうには思いません。日本でみんなそれほど経済力もありませんし、自分の国へ

帰られて、そして年金をもらって、絵だけに打ち込めるような生活を送られたというのは、ブプロワ先生にとって生涯最後の幸せであつたらうと、いま思います。

ただ、そこに至るまでの……。ちよつと想像してみてください。初めての土地へ七十二歳のときに行くわけですね。そこで知っている人というのは姉さんのマリーヤさんだけです。そこでもう一度生活を立て直すというのはいかに大変なことか。

それからもう一つ困難にしていた状況は、当時の美術界の様子です。社会主義リアリズムの全盛期でありまして、レーピンのような流れを汲む絵が支配しているわけですよ。で、ブプロワさんはレーピンが嫌いだったんです。移動展派というのは嫌いで、ブプロワさんが一番好きな画家というのは、マチスでした。それで大体想像していただけだと思います。

そういう人が帰国しますと、あるグルジアの文化大臣はブプロワさんの絵を評して、当時の最大のきつい言葉である、「形式主義者（フォルマリスト）だ」というふうには言ったんですね。もうそれだけでほとんど恐るべき状態が待ち構えているんですよ、ブプロワさんは幸いにその危険さがわからなかった。で、ああいう気の強い人ですから案外のんきに構えていらした。

実はブプロワさんは二度結婚していらして、最初の夫は、正式の結婚はしていらつしやらないんですが、マトヴェイと普通言っていますが、ロシア人じゃなくて、ラトビアの人だったんです。その人が一九一〇年代にペテルブルグで青年同盟という

アパンギャルドの団体を主宰します。プブノワさんもそこへ入って、その人と愛し合って、そして一緒にヨーロッパを旅行した。マトヴェイというのは、ロシアで初めてアフリカのニグロの芸術を発見した人です。そういう点では世界的に見ても非常に先駆的な人です。

そのマトヴェイはわずか二十歳で突如亡くなってしまいました。その思想を何とかしてロシアへ広めたい、それから日本の芸術とか美術とかヨーロッパの美術を実際に見ていて、ロシアへ帰って来て自分が何か役立ちたいと考えた場合、美術界がこんな状態ではいけないということで、一種の使命感を持ちまして、芸術論、美術論を何編か執筆なさるわけです。これは全部この本に収められております。いま読んでも非常に目新しいものだと思います。

それをちよつと場違いですが文学新聞に投稿なさったんですね。そのときの文学新聞の返事が非常に振るつています。一九六二年に例のフルシチョフが抽象画を見て「ロバのしっぽで描いた絵だ」といいましたが、「フルシチョフは画家が学ぶべき根源というのは人民の生活であるといっている。あなたは全世界の美術を学ぶべきだといっている。したがってあなたは正しい。そういう正しくないものはわれわれは掲載することができない。あなたは悔い改めろ」というようなことが書いてあるんです。こういうようなのが一般的な美術界の様子であつたわけです。

スフミのプブノワさん

この中でプブノワさんのような絵を描いていくというのは非常に困難だつたと思います。ですからプブノワさんはいわゆる批評家とか美術研究者というのは大嫌いだつたんですね。学者というのはもともと大嫌いなんです。これは非常にロシア人的だと思えます。

しかし、一九五九年にグルジアの美術同盟の会員になられまして、一九六〇年にアンナさんが帰国します。それから一九六一年からプブノワさんの日本時代の作品がいろいろなところで展示されるようになります。モスクワでも展示される。六二年にはいよいよ自分の生まれ故郷のレニングラードでも個展が開かれるわけです。こういうように徐々に愛好家が出てきます。この愛好家のほとんどは若い人で、しかも自然科学者が多かつたんです。私が何回か訪ねたときも会つたことがあります。物理学者が非常に多くて、いわゆる美術研究者というのは近寄つて来なかつた。

六〇年頃私がいだいた手紙にも、「こんな田舎にもやはり非常に興味を引く人がいるんだ」ということがだんだん書いてあるようになります。スフミに住まれてから二年後ぐらいからこういう兆候が出てきました。最大の課題であつた住宅問題が六四年にいよいよ解決されました。なんと六年間辛抱なさつた。プブノワ先生が日本にいらしたときも、実は日本に住む気はなかつたんですね。二二年にいらして、大体二、三年日本にいたら、アメリカ経由でロシアへ帰りたと思つていらしたんで



す。ですからあの人を白系ロシア人ということは間違いだと思  
います。いわゆる亡命者じゃなかった。

革命の受け取り方は、たとえばリディア・ギンズブルグなん  
かの受け取り方とダブラせて考えていくと、相当わかるんじや  
ないかと思っております。

大体六年ぐらい経った六四年頃から、ブブノワ先生というの  
はものすごい生活力があつたものですから、根を下ろすわけ  
です。やがて六六年の手紙を見ますと、「ああ、もうモスクワよ  
り、あの静かなスフミへ帰りたい」というふうに書かれるよう  
になります。日本も、二二年にいらして、二七、八年からは  
「ああ、日本は住みいいところだ」というふうに変わってい  
かれます。その土地に順応するのに大体六年ぐらいかかるんじ  
やないかと思ひます。

もう一つは、六四年頃から一番最後のテーマであるポ  
ートレットを描かれるようになります。私が十三年ぶりに会つた七  
一年頃というのは、ブブノワ先生の生活が落ち着きまして、そ  
れからもう一つ、六六年に、ちょうど八十歳記念にアブハジア  
美術家連盟からの推薦でグルジア共和国の功労芸術家という称  
号を得られて、これによって年金が増えて生活が安定してい  
きます。六六年というと、スフミにいらしてからちようど八年  
です。もう完全に根を下ろされたと考えていいと思います。周  
りには若い人が出てくる。  
ですから私が行った七一年というのはブブノワ先生の生活が

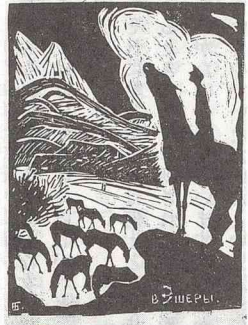
もう相当安定した時期だと考えていいと思います。何といつて  
もブブノワ先生は画家なものですから、町田の展覧会をご覧に  
なつたことがあるかと思いますが、念のためにちよつと作品を  
見てください。



これは自画像です。



先ほどブブノワ先  
生は赤の色が好きだ  
と言いましたが、こ  
の赤の色が大好きな  
んです。こういう大  
胆な絵をよくお描き  
になつた。まあ社会  
主義リアリズムに合  
うはずがありません  
ね。



これもやはりグルジアの山のほうにいらしたときの作品です。私が大好きな作品です。

これはわが家の絵です。

私がスフミへ行きましたときに、プブノワ先生が別れるときに、「安井さん、あなたには絵は上げません」と。これはプブノワ先生の言ひ方なんです。私の反応を見ていて、私が嫌いな顔

を見ると、それを楽しんでいらしたんですね。それがうれいらしいんです。「日本の男の人には絶対上げません。女の人だけに上げます。四人の方に上げます。横田先生の奥さま、除村さんの奥さま、網野菊さん、それからあなたの奥さまに上げます。どの絵がそれぞれの人にいいか、あなた選びなさい」と言つて四枚の絵を渡されました。先生はどれを誰に上げるかは頭の中にあるんですが私を試されているわけです。そしたらうまく当たつたようで「ああ、それならよろしい」ということで。

スフミのプブノワさん

先ほど言いましたプリシヴィンの奥さんからも私はそういう試験を受けたことがあります。ロシア人は親しくなると自分の写真をくれるんですけれども、「安井さん、この中から好きな写真を二枚選びなさい」と言つて五、六枚パツと出して、「ジーツと私の顔を観察しているわけです。で、私が「これとこれをください」と言つたら、わが意を得たごとく、よろしいということになつて試験を通りました。ロシア人はちよつとそんなところがありますね。したがつて、これは私の絵じゃなく、かみさんの絵でありまして、この絵につられてずうつと暮らしてきたわけです。(笑)

一九七一年、七三年、七四年、七六年、七八年というふうにスフミにまいりました。行きますと、三日間か四日間そこにいるわけですが、ホテルに泊まるときもありませんし、それから家に泊まれというので泊まつたこともありませんが、それはそれは疲れます。特に家に泊まつたりしたら、プブノワさんがものすごく強力な電波を発するわけですね。寝ていても、ジーツと寝ていることができないうんです。なんか目が光っているような気がして、いつ質問が飛んでくるかと思つて緊張しているんです。スフミに私のガールフレンドがいて、ときどき誘ひに来て、ドアをちよつと開けて一生懸命ウイंकするわけです。そうするとプブノワ先生は決まつてパツと目ざとくそれを感じまして、「安井さん、あなたはああんが嫌いですね。ああいう若い女の人があなたは好きですね」、「イイエ、先生が一番

好きですよ」と言うと、「本当ですか」といって、ようやくニコッと笑われる。

ですから、スファミというのは海で泳ぐところですが、私は一度も泳いだことがなくて、せいぜい散歩するぐらいですね。最初お元氣な頃は、よく二人で腕を組んで散歩していました。それは非常に楽しい体験です。

ブノワ先生から私がもらったものというのは、いろいろなことがありますが、先ほど言いましたように、年取ったロシア人だったらどう考えるかということを思うときに、いつもブノワさんと、それからプリシヴィンの奥さんと思うんです。エリザベータという女性がブノワさんの家事を手伝ってくれている。その人は学校で姉さんのマリーヤさんの同僚だったんですね。あるときブノワさん言うには、「革命というのは非常に悪いことをした。私もそう思う。だけどね、安井さん忘れてほしくないのは、もしも革命がなかったら、あのエリザベータという女性は決して先生になることはなかった、それからあんなに教養のある立派な女性になることはできなかった。これだけは忘れないでほしい」と、そんなような話をポツンとされるんですね。

それに類したことは何十とあります。それは私がロシアを考えるときにクギを刺されたような形で残っています、非常にありがたいと思っています。一生かかって解くような問いをそういう中でいただいたというふうに思っています。

日本を非常に懐かしく思っておられて、いつも日本の思い出話をなさるんですが、日本を非常に理解して、日本人というのは非常に美的な国民だ、美術、芸術というのが生活の中に生きているということをおっしゃっていました。

私もやっぱりそれにならって思いますが、日本人から美的な感覚を取ったら何が残るんだろうかという思いを強くしております。それは大切にしなければいけないと思っています。そういうことに気づかせていただいたのは、結局ブノワさんのおかげだということふうに私は思っております。

毎週木曜日に若い画家が自分の絵を持って集まりまして、批評会が行われるわけです。そのときのブノワさんというのはものすごく厳しいですね。あるとき私はブノワさんと一緒に教え子の家に行って、その若い画家に対して、「いま安井さんがあなたの絵を批評するから」、といって私に無理強いな批評させようとしたんですね。

「私は絵の専門家でも何でもないので、そういうことは言えません」と言っていたんですが、「どうしても言いなさい。あなたは日本人である以上きつと言えないはずですよ」と言うんです。ですから、ロシア語もしゃべれませんし、ただひと言、禅問答のように、「ここには中心的なイデーはない」と言ったんですね。(笑)非常にきついことを言っちゃいました。そしてたらブノワ先生は手を叩いて喜びまして、「正解である」と。で、またブノワ先生の私への評価が上がりました。



プブノワ先生はそういうときは絶対容赦されなかった。これはまたロシアの魅力であります。

ロシアへ行って私が一番魅力を感じますのは、いろんな細々した必要でないことと重要なこととの間の区別が非常にはっきりしているということです。直接一番中枢の問題に切り込んでいく。そしてそのことについて非難し合ったとしても、それが後を引かないということです。

それで私はその若い絵描きとはその後も親しくしていますけれども、ああいうことを言ったからといって、彼はそのことによつて私を恨むわけではなくて、かえつてそのことによつて私を評価してくれる。これが私にとつてのロシアの魅力です。中枢の問題に直接入つていくということです。その中枢の問題に入つていくときに、もしこちらが真面目に真剣に対応するとすれば、それは決して妨げにならないということ、それが私にとつてのロシアの魅力です。

今回、一九七一年に初めて十三年ぶりに会つたときのノートをはひっくり返していましたら、こんなメモが出てきました。これはまた私にとつて非常に面白いんですが。

たとえば「イゾブラジャーチという言葉は自分は嫌だ。リサワーチという言葉でなければいけない」というようなことをおっしゃるんですね。そうすると、あ、イゾブラジャーチというのとリサワーチというのはそういうふうに区別するののかつてよくわかつてくるんです。

スフミのプブノワさん

これに類したことはいっぱいあるんですね。「新しい対象を描くときは、そのたびにそれにとつて最もふさわしい方法を考えるべきであつて、経験に頼り過ぎちゃいけない」と。まあこんな格言のようなことをおっしゃるわけじゃないですが、別れてホテルへ帰つてから早速ノートに書くわけです。こういういろんな面白いことをいっぱい言つていってくださった。

先ほど言いましたように、帰国されて六年後、六四年頃から生涯にとつて最後のテーマであるポートルレットに進まれるわけです。特に最初は女の人のポートルレットを描いていましたが、やがて男のポートルレットに入ります。それは最晩年になります。それから私がもらう手紙のほとんどに「いまは色彩と苦闘している」と。そのときに、私が送つたマチスの画集が非常に役立つと。

色彩と苦闘して、その後、ポートルレットの男のほうに移つた。自分はいままでそんなことは考えなかつたけれども、何とかして似せたいと思うようになった。それはただ外面的ばかりじゃなくて、内面的にも似せたいと思つた。心理分析的な要素を自分は書きたいと思うようになったというような、非常に微妙な重要な問題をここで書いていらつしやいます。ぜひこの書簡をお読みいただければありがたいと思います。

もう一つ、私との文通は、一九五九―七七年で、七十三―九十一歳の十八年間にわたつて三十六通残つております。それを見ますと、当然のことながら、人間が老いていくという問題が

おのずから出ているわけです。たとえば二階の展示場でもう一度私がいただいた手紙の筆跡をご覧ください。一番最後の手紙が展示されておりますが、あのときはもう力がないんです、でも内容は実に張りつめたような内容です。

自分が年取ってきたということを嘆かれるようになったのは、やはり八十代になってからです。それからは、老いるということとは非常に奇妙な状態だ、心はやはり生きていて、本を心は買いたがるけど、そのくせどうも読む気がないと。

手紙は非常に理性的で、分析的で、意志的なんです。これは驚くべき強靱な精神が生きていたんだと思います。私なんかは六十だというのにもう衰えて、これを読むと……でも結論は、ブノワ先生と比較するのは無理だということになります。

一番最後に、八十九歳のときにこんな手紙を書いていらっしやいます、「いまま少し生きて、ペンと絵筆で少しかき、人々を眺めて、人々と交わっていききたい」と。

だんだんめまいがしてきたり、ひよんなことで居眠ったり、居眠っていて椅子から転がり落ちたり、骨を折ったり、人間が老いていくことに伴う現象というのが全部ブノワ先生にも現れます。しかし同時に、この書簡を見て思いますのは、ますます頭が冴えていったということ、精神が冴えていったという感じがするわけです。

私が学生のときに、この人は非常に偉い人だ、本物の人間が立っているということを感じたのは、これは若いのがゆえに直感

的に感ずることができたんだろうと思います。だけれどもその実体が何であるかということが、ようやく、スワミに行つてつき合っているうちに、それから最晩年の亡くなられる一年前の九十五歳のブノワさんを数回横に座つて黙つて見ている間に、だんだんわかつてきました。きつとこの人は非常に複雑な人だったんです。

きょうは欠席裁判をするようですが、イリーナ・コジェヴニコワさんの本で一つだけ残念に思うのは、ブノワさんの複雑さというか、矛盾に満ちたところがちよつと足りないんじゃないかという思いがします。これは彼女にもそう言つたわけですから、ここでしゃべつても構わないと思います。

非常に複雑な人間でありながら、実は非常に純粹な人間であつたということ、これが一番基本ではないかというふうに思います。

ブノワ先生が私たち若い者に非常に影響を与えられたといつても、先生は決して一度も自分が教育者だと思われたことはなかつたと思います。自分は画家であると思つていらしたんですね。そのことがきつと私たちにピンときたんだというふうにいまだんだん、だんだんわかつてきたんです。

それから、先ほども言いましたように、私は露文に入るときは、クロボトキンの『ロシア文学の理想と現実』とか、マヤコフスキーの『詩集』というのが高校時代に出まして、それを読んで感動して、そして露文に入ろうと思つて、露文に入ったわ

けですが、どうしても人間の歴史の上で初めて社会主義国をつくったロシア、ソビエトというイメージが非常に強かった。

それでブプロワ先生に会いまして、いや、違うロシアがあるかもしれない、本当のロシアはソビエトにはないんじゃないかという予感がしてきた。それを何とかして解こうと思って、ズルズルと、自分でも予想外ですが、こんなにロシアにかかわっていくとはそのときは夢にも思いませんでした。そういう歩みをしちゃったわけです。

ブプロワ先生が投げかけてくれたものがいかに深いものであったか、数十年にもわたって有効である深いものであったかという思いがします。

私がロシアで親しくしているボチャロフとか、コージノフとかいう私よりちょっと年上の友人がいますが、もう二十年以上もつき合って一番仲のいい友達ですが、彼らが五〇年代、やはり若いときにバフチンに会いに行つて彼らがビックリしたのは、自分たちが育ってきた文化と全く違う文化を体現している人間が目の前にいるという驚きです。そのときボチャロフとか、コージノフとかは新しい歩みをそこで始めていくわけです。

私なんかがそんな人たちと比較するのはおこがましいんですが、それと同じような体験を、クロポトキンとか、マヤコフスキーでロシアを描いていた私が、本当に生身のすばらしい……、まあロシアでもあんな人はそんなにいないと思いますが、そういう人の姿を見たときに、それに気がつき始めたということ。

スフミのブプロワさん

で、それを何とかして自分で内部から理解してみたいと思った、そういうきっかけを生んでくれた人だというふうに、ブプロワさんに感謝しております。

ブプロワさんは非常に複雑で、それで非常に大きな人だったものですから、ブプロワさんに教わった人はそれぞれブプロワ像というのを持っていると思います。これはあくまでも私の感じたブプロワさんですけれども、私はブプロワさんというのをそういうふうに見ています。あくまでも画家であつた人だといふふうにいってもいいと思います。そこからすべてが発発したんじゃないか。最近になつてようやく全体の姿というのを少しとらえることができるようになったんじゃないかと思います。どうも取りとめの話でしたが、ご静聴ありがとうございます。(拍手)

#### ○図書館事務部長

ありがとうございます。せっかくの機会ですので、安井先生に何かご質問がございましたら、どうぞ遠慮なくお手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。それでは、二階の会議室で展示を開催しておりますので、お帰りにぜひご覧をいただければと思います。

それでは最後にもう一度安井先生に大きな拍手をちょうだいできればと思います。ありがとうございます。

それでは本日のブプロワ展開催記念講演会をこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。